

News Letter

Foreign Student Service, Agriculture

西北農林科技大学を訪ねて

高橋 強

[前評議員・農学研究科教授・地域環境科学専攻]

2001年5月28日付けにて中国の西北農林科技大学副校長魏益民氏より松野研究科長あての、中国西部大開発に関する国際交流セミナーへの招へい状が届けられた。同大学は中国教育部の管轄のもとで、1999年に7大学を統合して設立された農学系の総合大学であり、国家重点32大学の一つに数えられるとのこと。漢や唐の都として栄えた陝西省西安市の西90kmの楊凌にあり、西部大開発の拠点校として14の学院から成り、教職員数2,600人、学生数は1万人を越えるといわれる。この度、本学農学研究科との学術交流を図るため、中国西部大開発に関する交流セミナーへの招待を受けたもので、先方と協議の上、希望する専門分野に応じて、谷坂隆俊教授、林孝洋助教授（以上、農学専攻）、今井裕教授、奥野哲郎教授（以上、応用生物学専攻）、大島誠一教授（演習林）、安達修二助教授（食品生物学専攻）、大手信人助教授と筆者（以上、地域環境科学専攻）の8名が参加することとなった。

一行は2001年9月10日、前夜来心配された台風の影響もなく関西国際空港から西安空港に直行し、11日からの交流セミナーに臨んだ。セミナーは楊凌国際交流センターにおいて、日中双方からの開会の挨拶、基調講演の後、12日の正午まで、農学セッションと経済学セッションに分かれて日中双方から報告が行われた。経済学セッションには立命館大学、関西大学、東京国際大学からの参加者が出席され、本研究科の8名はすべて農学セッションで、それぞれの専門分野に応じて日本の研究の現状や中国西北部での研究課題等について貴重な話題提供が行われた。

ただ、残念なことは、当日は西北農林科技大学の入学式と重なったとかで同大学からの参加者が少なく、専門分野を同じくする研究者同志の交流や専門分野に関わる学術的な意見交換が十分にできなかったことであるが、これを契機として大学間のみならず、研究者相互の交流につながることを期待したい。昼食時には別室にて陝西省人民政府副省長（西北農林科技大学校長）陳宗興氏、党委員会書記（校務委員会主任）孫武学氏と会見の後、歓迎横断幕の下で記念撮影に臨んだことはいかにも中国的で、印象的であった。

12日午後は西北農林科技大学構内を視察した。克隆（クローンと読む）羊の研究に熱心な畜産試験場、蝶類の収集で有名な昆虫博物

館、小麦研究センター等を訪れたが、どこでも常設のプレゼンテーションルームが設けられ、展示に種々の趣向を凝らして民間にも開放されており、地域社会への貢献という点で見習うべきものもみられた。

翌13日からは楊凌から北へ、黄土高原の延安を通過して毛烏素沙漠の入口榆林まで片道700kmの3泊4日の視察旅行であった。トウモロコシ畑の広がる西安周辺の平坦な畑地帯から次第に浸食崖が目立つ黄土高原の丘陵地、毛烏素沙漠へと至る間の地形と植生の変化を目のあたりにすることができ、途中日本からの移入によるという洛川のリンゴ園、安塞の水土保持研究所、延安の中国共産党革命記念館、榆林の治沙研究所等を訪れ、沙漠の緑化にかける熱意と研究の一端に触れることができた。

16日は榆林から西安まで一気のロングドライブであった。道路はかなり整備が進んでおり、快適なドライブとなる場所であるが、沙漠には珍しく雨天となり、泥んこ道で大型タンクローリー車のスリップ事故が続出し道路は大渋滞であった。果たして無事に帰れるかと心配したが、朝7時30分に出発して西安のホテルにたどり着くことができたのは夜11時過ぎであった。それにしてもタンクローリー車の運転の粗さは脅威的である。我がマイクロバスのドライバーの運転技術に感謝。

今回の交流セミナーは、両大学間の学術交流の第一歩として終始熱烈歓迎を受け、今後の学術交流の進展にかける西北農林科技大学関係者の熱意を身に沁みて感じた次第である。関係者のご厚意に深く感謝するとともに、今後の学術交流の進展を祈念したい。謝々。



参加者一同で記念撮影（前列中央筆者）



Academic Exchange

Bruce Auld

(Visiting Professor,
Orange Agricultural Institute, Australia)

Academic exchange is a stimulating exercise, not just for those directly involved but also for others around them. On a practical level, the person taking a break from his normal post leaves his colleagues coping without him and those receiving the visitor have to deal with a stranger within their gates. While for some, change is simply disrupting, most scientists welcome change as it is often the mother of invention and new ideas are the currency of science. The visiting academic may bring some fresh seeds of ideas and ask some strange questions. Some of these could stimulate a fertile mind and bear fruit. In exchange, he will also export with him ideas and wisdom from his new colleagues.

International academic exchange is especially refreshing for the visitor. Leaving his usual commitments an ocean away and with everything new around him, he can think freely and widely again. To live in another country for more than a few weeks is

in itself an education. To be involved in international collaboration is very satisfying. In agricultural research, it helps to break down national and cultural constraints and to bring sharper focus on more widely relevant scientific issues.

The visitor is provided with the luxury of time for more contemplation. This is important in any field of endeavour. In using this time, the visitor will hopefully develop ideas to a degree of maturity that would not be possible in such a relatively short period at home. From these developing ideas and through discussions with host colleagues new directions and collaboration are formed.

During my time at Kyoto University I have become intrigued by the invasive flora in Japan and how many species there are in common with the invasive flora of eastern Australia: more than 200 species. Although both countries stretch across similar latitudes, they have vastly different physiographies and histories of human occupation. Conversely, why are certain exotic species widespread in one country and not in the other? There are many interesting scientific questions within both the generality and detail of these comparisons and practical implications in terms of quarantine.

I have also learnt about a range of projects in the Graduate School of Agriculture which have broadened my horizons in terms of subject matter and scientifically. As a scientist but coming from an applied agricultural research laboratory, it is a pleasure to be in a University environment where projects may be pursued for their intrinsic scientific value.



Teaching experience in tropical soil management research at Kyoto University

Marc Latham

(Visiting Professor,
CNEARC¹, Montpellier, France)

When Dr Ueru Tanaka sent me a message in France asking if I would come for some time in Kyoto, I was intrigued, interested, and eager to discover Japan and Japanese culture. I was intrigued as I was not sure how I could be of any help to the Graduate School of Agriculture, Kyoto University but my interest primed. I therefore warmly accepted the invitation.

As regards to my place in the system, I could rapidly see where I could fit. Foreign students, here like in France or elsewhere need a listening ear to their research problems and an opportunity for these discussions to occur. Eleven lectures on Tropical Soil Management Research were the opportunities for some of these exchanges. Others took place in my office.

Tropical rural development studies in France—at CNEARC in Montpellier but also at the "Institut National Agronomique" in Paris—are mostly based on the understanding of farming systems, of farmers' practices and on the process of diffusion of the innovation. This approach implies an understanding of technical but also of economical and social aspects of the rural development. It means that interdisciplinary studies are at the core of the formation. It means also that problem-solving approaches are preferred to disciplinary ones. In didactic terms, it

implies that an interactive approach is taken. This choice does not go without difficulties. Scientific disciplinary departments in universities tend to reject this orientation at the doctorate level, leaving geographers as our main interlocutors. Professors have the daunting task to deepen the study of their discipline and to open up on other disciplines to answer their questions. Yet, research in complex rural development systems in the tropics is at that price.

Coming to Kyoto University, I tried to apply some of these principles during my lectures. I first tried to have them speak and we agreed with the students that they would read, each week, a scientific paper related to the subject of the lecture. The paper was then discussed as an introduction to the subject. This exercise gave us some very interesting exchanges of ideas. Many of these foreign students, having already some field experiences, could bring their experience in the discussion. The Japanese students attending could share their own views on the subject.

These students being essentially in Masters or Doctorate courses, rather than giving them only technical knowledge, I tried to help them to organize their knowledge for their research. I insisted on social and economic aspects of soil management, which were not covered in their previous studies. We discussed the role of research but also of NGOs and of the civil society in practical rural development issues. At the same time I insisted on field activities and on research practicalities. Not surprisingly, during the final evaluation of the course by the students, besides their mark of interest in the experience, came also their request for field activities in Japan.

¹ Centre National d'Etudes Agronomiques en Regions Chaudes



第二の故郷—日本

張 春花

(森林科学専攻・中国)

今から遡ると、それは9年前のことになるが、初めて日本に来た時の私は、興奮、驚き、好奇心に包まれ、毎日胸をわくわくさせながら、明日の新発見を楽しみにしていた。今まで何気なく口にしてきた「百聞不如一見」、つまり「百聞は一見に如かず」と言う諺の意味を、体全体で感じたその時の感動は、いまだに忘れることができない。

私の日本での初生活は、地図を片手に姫路の町や郊外を自転車で行きまわると言ったことから始まった。穏やかな気候、新鮮な空気、緑の山、青い海、そして数え切れない綺麗な川は、私に日本は如何に美しい大自然に恵まれているかを実感させた。自然だけではなく、綺麗な市街、永遠に続く高速道路、それを埋め尽くすような車、時刻表通りに動く電車とバス、駅の自動切符売り場、自動改札口、至るところに設置されている公衆電話と自動販売機は、経済大国の豊かさをそのものを語ってくれた。また、市役所、郵便局、警察所等の役員を始め、駅、銀行、病院、スーパーマーケット等の従業員に至るまで、自らの真面目な仕事振りで、日本国民は如何に責任感が強く、勤勉で、奉仕精神に満ちている、礼儀正しい民族であることを教えてくれた。故郷—中国でのテレビや新聞、雑誌などのメディアによる情報を基に、イメージしてきた日本とは、相当なずれがあった。間違いなく自分の目で見た、物質文明と精神文明が一体化された日本であった。

ときめきの2週間が経ち、見物旅行から通常の生活に戻った時、そこで待ち構えていたのは、甘くない現実と思いがけないカルチャーショックだった。来日する前、私は勤めていた大学で一年間日本語の特訓を受けた後、教育部(文部省)主催の外国語試験を受け、見事な成績で日本語レベルA級に合格した。そのお陰で、日本に来て直接テレビでニュースを見ることができ、生活していく上で一番肝心な仕事も、すぐ見つけることができた。自分の語学力にある程度自身を持っていただけに、初日お客さんのリクエストを聞き取れなかった時のショックは相当大きかった。「なんぼ?」、「ほんま?」、「おおきに!」、「あきまへん!」、「ちゃう?」、「…さかいに」……、会話の中であれほど頻繁に交わされている言葉なのに、教えてもらった覚えは全くない! あれって日本語? 自分の耳を疑った。しばらくしてやっと、標準語しか習わなかった自分が、今東北地方ではなく関西地方に居ることに気がついた。もしかしたらこれはこの地方の方言では?! とふっと思いついたが、正解だった。バリバリの関西弁だった。それ以来、私は毎日標準語と比較しながら関西弁を覚え、また常に関西

弁を意識しながらの会話を試みた。その結果、一ヶ月後にはお客さんのリクエストが分かるようになり、更に半年後には、電話での応対もできるようになった。その時の私の心は、小さな達成感に満ちていた。

今までの「常識」が思いっきり覆された時のショック。ある日、私は車にガソリンを補給するため、あるガソリンスタンドに寄った。当時5歳だった息子と一緒に。30歳ぐらいに見える女性従業員が、息子に親切にキャンディーを渡してくれたので、早速「おばちゃん、ありがとう」と、息子にお礼を言わせた。一瞬にして顔色が変わった彼女は、息子に「おばちゃんではなく、お姉ちゃんだよ」と訂正してくれた。さすが、「お客さん」と言う立場に置かれていた私に、直接怒ったりはしなかったが、彼女の顔色そのものが、「非常識」な私のことを、どれほど怒っているかを物語ってくれた。中国では、ちょうど逆である。上記の場面で、お姉ちゃんと呼ばれたら、それこそ自分が子供扱いをされていると、気分を悪くするに違いない。同じ言葉に対する反応が、国によってこんなに違うなんて、初めて体験する「カルチャーショック」だった!

異文化による様々なカルチャーショックは、その後もあとを絶たなかった。日本に来て間もない私は、友人の家に招かれた。御馳走として綺麗に盛り付けられた上等な刺身が出されたが、火の通ってない生魚料理を食べるには、どうしても抵抗があった。それでも心のこもった友人の持て成しに伝えようと、刺身にわさびをたっぷり付けて口に入れた。じっくり味わって見ようと、一噛み、二噛み、三……、突然鼻がつんとしてきて、両目からは涙まで出てきた。何が起きたか分からないまま、慌てて丸呑みしたので、本当の味を味わうことができなかった。みっともない姿を披露した私は、刺身もわさびも、梅干、納豆同様に、自分の味覚には合わないものだと思いつけた。皮肉なことに、その刺身とわさびが、何時の間にか毎日食べても飽きないぐらい大好きになっていた。また、それほど苦手だった梅干も、納豆も今は大好物になっている。最近、海外にしばらく滞在すると、真っ先に恋しくなるのが「和食と演歌」と言うので、友人に「あんた日本人か?」と言われる自分が、不思議でしかたがない。

この様にして始まった私の「在日生活」も、もはや10年目を迎えようとしている。この9年間、嬉しかった事、悲しかった事、楽しかった事、寂しかった事、面白かった事、悔しかった事、……、数え切れない出来事は、焼印のように私の心の奥の一つ一つしっかりと押されてきた。山あり谷ありの人生ドラマそのものであった。住めば都、何時からだったか覚えていないが、海外から日本に戻る飛行機に乗って、久々にテレビから映ってくる日本語のニュースを見たり、機内で配る和食を食べたりすると、涙が出るほど懐かしくなる。空港から電車に乗り換え、車窓から流れて行く風景を目にすると、故郷に帰って来たような気分になり、はっとする。そして家に着くと、近所の人たちから「お帰りのなさい」と暖かく言われる。確かに、今は日本にも友達がたくさんでき、研究室と隣近所にも恵まれたこともあって、とても楽しい日々である。だが、遅かれ早かれ「さようなら—日本」と言わなければならない日が来る。でも、何処に行っても10年間も過ごしてきた「第二の故郷—日本」を、一生忘れられないだろう。

農学部国際交流ニュース

新入留学生のためのオリエンテーションと歓迎パーティー

平成14年度、農学研究科は10カ国から25名の新入留学生を迎えました。4月9日、オリエンテーションに引き続いて、教職員および在学留学生約150名の参加を得て、恒例の歓迎パーティーが農学部大会議室で盛大に行われました。開催に当たり、農学部国際交流推進後援会より援助ならびに御高配を賜りましたこと、ここに感謝いたします。

農学部国際交流推進後援会の会員加入について

本年は、7月に平成14年度の会員加入のお願いを御案内いたしました。本年度も学内および学外の多くの方々(9月末日現在で139名、2団体)からご賛同をいただいております。引き続き随時受け付けておりますので、よろしくお願ひ申し上げます。

ア・ラ・カ・ル・ト

私費外国人留学生の大学院修士課程入試の結果

8月27日~29日にかけて、平成15年度大学院修士課程入試が実

施されました。その結果、農学専攻2名(中国)、森林科学専攻1名(中国)、応用生命科学専攻2名(中国)、応用生物科学専攻1名(ホンジュラス)、生物資源経済学専攻1名(中国)の方々から私費外国人留学生として合格されました。

短期留学推進制度

平成14年度の短期留学推進制度(派遣)には応募者がありませんでした。

サッカー&バーベキュー大会

留学生と日本人学生・教職員の交流を深めるため、今年、韓国・日本でワールドカップサッカーが行われたのを記念して、平成14年度6月16日(日)に初の試みとして、サッカー部OB、農学部国際交流推進後援会、留学生室主催の農学部サッカー&バーベキュー大会を開催しました。御寄付いただいた教職員の皆様、本当にありがとうございました。当日は素晴らしいお天気に恵まれ、約80名が参加して、日韓選抜チームと世界選抜チームを結成しました。両チーム対戦の結果、2対1で世界選抜チームが勝利しました。サッカー後のバーベキュー大会も、さまざまな国の人が入り混じり、和気藹々とした雰囲気の中で行われました。

外国人客員教授

平成14年10月～平成15年3月、外国人客員教授として下記の6名の先生方を招聘しています。

氏名：**KRAUS WOLFGANG FRANK**
 国籍：ドイツ国
 招聘期間：平成14年1月6日～平成14年12月31日
 所属・職：ホーエンハイム農科大学・有機科学研究所・名誉教授
 研究題目：野外調査：生命科学における有機化学
 受入教官：大東 肇教授（食品生物科学専攻・生命有機化学）

氏名：**LARS LÖNNSTEDT**
 国籍：スウェーデン
 招聘期間：平成14年10月1日～平成15年2月28日
 所属・職：スウェーデン農科大学林業経済学科・教授
 研究題目：小規模林業経営に関する研究
 受入教官：岩井吉彌教授（森林科学専攻・森林・人間環境学）

氏名：**YOO KYUNG HAK**
 国籍：アメリカ合衆国
 招聘期間：平成14年10月1日～平成14年12月31日
 所属・職：アーバン大学・農工学科・教授
 研究題目：大規模灌漑地域における土壌および水環境保全、土地被覆変化に関する研究
 受入教官：田中 克教授（地域環境科学専攻・比較農業論）

氏名：**CHENG KE-SHENG**
 国籍：台湾
 招聘期間：平成15年1月1日～平成15年3月31日
 所属・職：国立台湾大学・バイオ環境工学部・教授
 研究題目：リモートセンシング手法の水環境工学への応用
 受入教官：三野 徹（地域環境科学専攻・水環境工学）

氏名：**BARI MUHAMMAD FAZLUL**
 国籍：バングラデッシュ
 招聘期間：平成15年1月1日～平成15年3月31日
 所属・職：バングラデッシュ工科大学・教授
 研究題目：周辺農業地域の都市拡大による土地利用・環境への影響評価
 受入教官：鳥井清司（地域環境科学専攻・比較農業論）

氏名：**ZAGORSKA-MAREK BEATA**
 国籍：ポーランド
 招聘期間：平成15年2月1日～平成15年8月31日
 所属・職：プラスロウ大学・植物学教授
 研究題目：広葉樹木部における細胞の接線面配列の制御機構
 受入教官：藤田 稔（森林科学専攻・樹木細胞学）

客員教授講演会

演者 **HUGH JOHN BARCLAY** 教授
 (Pacific Forestry Center, Canadian Forestry Service, Canada)

演題 **The Distribution of Leaf Angles in Conifers**
 日時 2002年6月26日(水) 13:30～15:00

演者 **MARC DANIEL LATHAM** 教授
 (CNEARC, France)

演題 **Sustainable Land Management in the Tropics**
 日時 2002年6月26日(水) 15:30～17:00

バス見学旅行

5月23日、農学部のスツールバスを利用した日帰りのバス旅行を実施し、京都府乙訓郡大山崎山荘美術館と大阪府茨木市にあるサッポロビール大阪工場を訪問しました。大山崎山荘美術館では、閑静な古い洋館、モネの絵画「睡蓮」を模した池のある庭園、美術品を楽しみ、サッポロビール大阪工場では、ビールの製造工程を見学しました。工場見学後、サッポロビールを試飲させていただきながら、工場の方々との交流の場を持たせていただきました。話が弾み、少々飲み過ぎた(?)人もあったようです。

見学旅行

平成14年度も、農学部留学生見学旅行(7月30日～8月1日)を企画し、総勢23名が香川県小豆島、ふるさと村のロッジに滞在しました。マルキン忠勇の醤油工場およびマルキン醤油記念館を訪問し、料理に欠かせない醤油の製造方法について学びました。日頃、よく利用する醤油であるだけに、質問時にはさまざまな質問が飛び交い、有意義な時間を過ごしました。また、手打ちうどんの実習や夕食を自炊し、それぞれのお国自慢の料理を披露して、留学生間の交流を深めることができました。

留学生室プレカウンセリング室の開設

本部留学生センターには、留学生が研究上・生活上の問題などを相談できる相談室が開設されていますが、農学部留学生室では、問題が深刻化する前に、孤独感、研究上のプレッシャーなどを解放する場として、今年度10月から下記の時間帯、場所でプレカウンセリング室を開設しています。日本語講師の福本先生が相談員として待機しておられますので、皆さん気軽にお越しください。

毎週水曜日午後1時～3時(留学生室談話室)

スタッフ：福本和代先生



優勝トロフィーを手にする世界選抜チーム
 (サッカー&パーベキュー大会)

Pre-counseling room for Foreign Students

If you have any problems on your research and life or feel loneliness, please come to the foreign student advisor's office, Faculty of Agriculture. We started a pre-counseling room from October. Although Foreign Student Division & Center for Student Exchange in the main campus already have a counseling office, the object of our pre-counseling room is to release your pressure and to alleviate your loneliness before you have serious problems. Ms. Kazuyo Fukumoto (Japanese teacher) stays at the following time and place.

Time & Place: Every week, Wednesday, 1:00～3:00 pm (Common Room of the foreign student advisor's office)

Staff: Ms. Kazuyo Fukumoto



マルキン忠勇醤油工場前にて

発行所 京都市左京区北白川追分町
 京都大学農学部留学生室
 電話 (075)753-6298, 6299

印刷所 京都市上京区下立売通小川東入
 中西印刷株式会社
 電話 (075)441-3155～8